

最近の症例から (28)

— 6年を経て発症した含菌性嚢胞の1例 —

栢本大祐, 小松 史, 堂東亮輔

松本歯科大学 口腔顎顔面外科学講座 (主任 山岡 稔教授)

含菌性嚢胞は, 硬組織形成後に歯胚上皮が嚢胞化するによって発症するとされる. その好発年齢は20歳代で, 上顎前歯部と下顎白歯部に好発し, 嚢胞腔内に埋伏歯の歯冠を含んでいることが多い.

今回, 初診後6年を経て含菌性嚢胞が形成された症例を経験したので, そのパノラマX線写真を供覧する.

症 例

患 者: 15歳, 男性

初 診: 1994年9月13日

主 訴: 左側下顎角部腫脹

家族歴: 特記すべき事項なし

既往歴: 初診時 (1994年), 左側耳下腺炎と正中過剰埋伏歯の診断にて, 5日間の抗菌剤投与 (CCL 750 mg/day) を行い, 耳下腺部の腫脹軽減後に当該埋伏歯の抜歯を施行した. 写真1, aは初診時のパノラマX線写真を示す.

現病歴: 1999年12月上旬頃より左側下顎角部の腫脹に気付くも放置していた. 腫脹の増大と左側

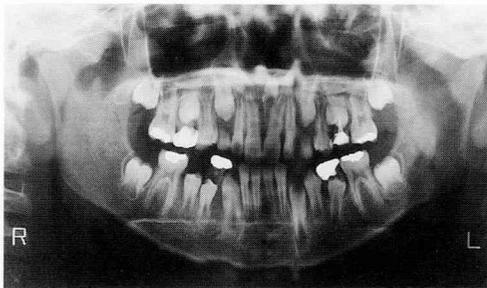


写真1, a: 9歳初診時のパノラマX線写真.

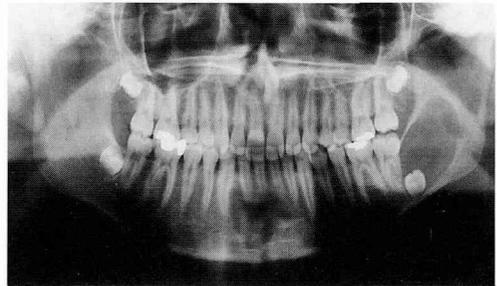


写真1, b: 再診時 (15歳) のパノラマX線写真. 左側下顎角部に埋伏歯とその歯冠を含む境界明瞭な透過像を認める.

下顎第2大臼歯の遠心歯肉から排膿を認めため, 同年12月16日当科を受診した.

現 症

全身所見: 特記事項なし.

局所所見: 左側の下顎角部から頬部にかけてびまん性の腫脹と, 左側下顎第2大臼歯の遠心歯肉に発赤をともなう腫脹を認め, 遠心のポケットか



写真2: 摘出した嚢胞.
↑: 埋伏歯の歯冠を示す.

ら乳白色漿液性の排膿を認めた。

X線所見：パノラマX線写真において左側下顎角部に埋伏歯の歯冠を含んだ単房性境界明瞭な透過像を認めた(写真1, b)。

臨床診断：含菌性嚢胞

処置および経過：受診時より抗菌剤(LAPC 750 mg/day)の投与を行い, 2000年1月13日, 全身麻酔下にて嚢胞摘出開窓術と埋伏歯の抜歯を行った(写真2)。

病理組織診断：含菌性嚢胞